

# きたかわほりちょう 北河堀町所在遺跡（KC12-1次）発掘調査

## 現地説明会資料

2012年12月22日(土)

大阪市教育委員会・(公財)大阪市博物館協会 大阪文化財研究所

### ■ はじめに

今回の発掘調査は、四天王寺から南へ500m、JR天王寺駅から北へ250mの場所で、約2,100㎡を対象として実施しています。調査地は大阪市内を南北に延びる上町台地<sup>うえまち</sup>の上に位置します(図1)。古代にあっては、想定される難波京<sup>なにわきょう</sup>の南端に位置し、調査地の北側には和気清麻呂<sup>わけのきよまろ</sup>が河川の掘削工事を行った跡とされる谷が東西方向に走っています(図2)。

### ■ 調査成果

今回の発掘調査では、掘立柱建物<sup>ほったてばしら</sup>5棟(建物B～F)を発見しました(図3)。建物Fが総柱建物<sup>そうばしら</sup>である以外はすべて側柱建物<sup>がわばしら</sup>です。また、すべての建物が東西南北に軸線をそろえて建てられています。

5棟のうち中心となる建物は南北方向の建物Dで、桁行は6間(14.3m)、梁行はおそらく3間(6.3m)で、身舎<sup>みや</sup>の床面積は約91㎡です。また、建物の4周には庇<sup>ひさし</sup>がついていたと考えられ、庇部分を含めた床面積は約177㎡となります。柱穴の規模は一辺1.0～1.5m、柱の直径も30cmと、当時の宮殿であった難波宮<sup>なにわのみや</sup>の遺構と比べても遜色がありません。この建物Dを囲むようにして、北側には東西方向で桁行6間(15.8m)、梁行2間(4.8m)の建物B、西側には南北方向で桁行5間(15.0m)、梁行2間(4.7m)の建物C、東側には南北方向で桁行5間(9.9m)、梁行2間(4.2m)の建物E、南側には東西方向で桁行3間(7.9m)、梁行2間(5.2m)の総柱建物Fが配置されています(図4)。

これらの建物B～Fは、柱筋をほぼ揃えて並ぶことから、計画的に配置され、同時期に存在したものと考えられます。ただ、その時期については、この建物群の時期を明確に示す土器などの遺物がまだ得られていないため、厳密に決めることができません。しかしながら、①東西南北に軸線をそろえて建てられていること、②長方形を呈する柱穴の形状や建物のプランが古代に特徴的なものであること、③柱穴<sup>ほりかた</sup>の掘形が大規模であることから、7～8世紀に属するものと思われる。

建物群の性格については、5棟以上の大規模建物から構成されること、および東西50m以上、南北50m以上の広い土地を占めていることから、貴族の邸宅、ないしは宮外に置かれた役所であった可能性が考えられます。

### ■ 発掘調査成果の重要性

今回の発見でもっとも重要なことは、想定されている難波京の南端部で大規模な建物群が見つかったことです。今回見つかった建物群は、柱穴の大きさや柱の太さ、5間以上の大規模なプラン、対称性の高い配置、そして広い占地面积といった点から、難波宮などの宮殿内に配された建築群にも

匹敵する規模と規則性を備えたものです。貴族の邸宅なのか、あるいは役所であるのかを決定する材料はいまだ得られていませんが、この場所になぜこうした施設が造営されたのか、今後考えていく必要があります。

また、難波京との関係も重要です。難波京のプランについては諸説があり、発掘調査によって京の存在が実証されつつある段階で、京の具体的な範囲や条坊についてはいまだ具体的に考える根拠が不足しています。そうした中、今回の調査で建物群が見つかったことによって、難波京の南限が現状の想定よりも南になるなど、条坊復元に再考が必要となる可能性もあります。

さらに、住宅密集地に立地する難波京域の調査では、これまで古代の宅地の占める面積を論じることはまったくと言ってよいほどできませんでした。そうした中、今回の調査で少なくとも2,500㎡以上の広大な敷地を占める施設の存在が判明したことも、大きな成果とすることができます。

今回の発掘調査により、古代大阪の都市構造を考えるうえで重要な成果が得られ、今後、大阪における都市開発の具体的な姿を復元する上での重要な手がかりとなります。

### 用語解説

■ 難波京<sup>なにわきょう</sup>：大阪の上町台地には7世紀と8世紀の2度にわたって宮殿(難波宮)が置かれた。この宮殿の周囲には碁盤目状に区画された都市域(=京)が存在したと考えられており、これを難波京と呼ぶ。

■ 掘立柱建物<sup>ほったてばしら</sup>：穴を掘り、そこに柱を立て埋め戻す柱の立て方を掘立柱、掘立柱によって構成される建物を掘立柱建物と呼ぶ。

■ 総柱建物<sup>そうばしら</sup>：建物周囲に加え、内部にも柱を設けた建物。建物の用途は床貼りの倉や門などが考えられる。

■ 側柱建物<sup>がわばしら</sup>：建物周囲を囲む柱によって構成される建物。床は土間であったと想定される。

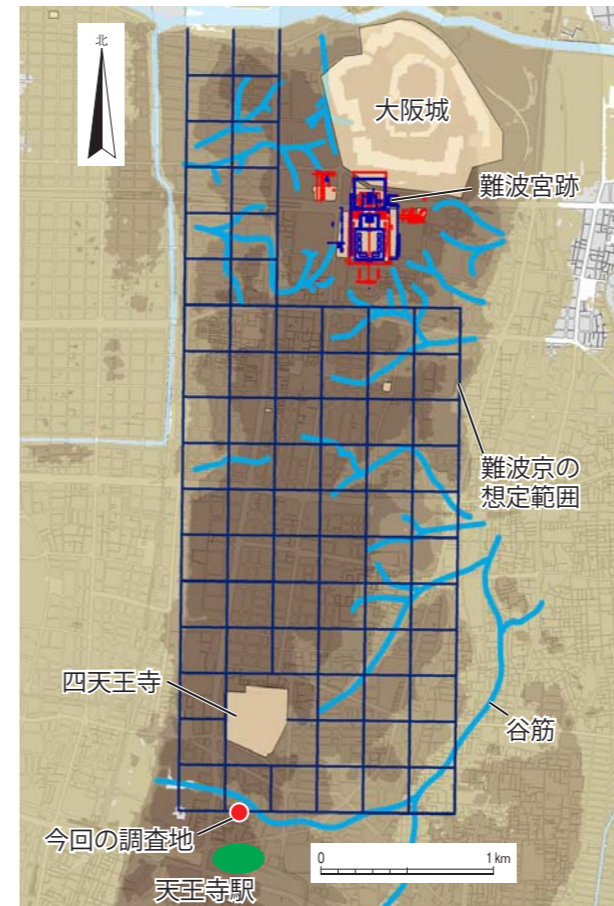


図1 想定難波京と今回の調査地

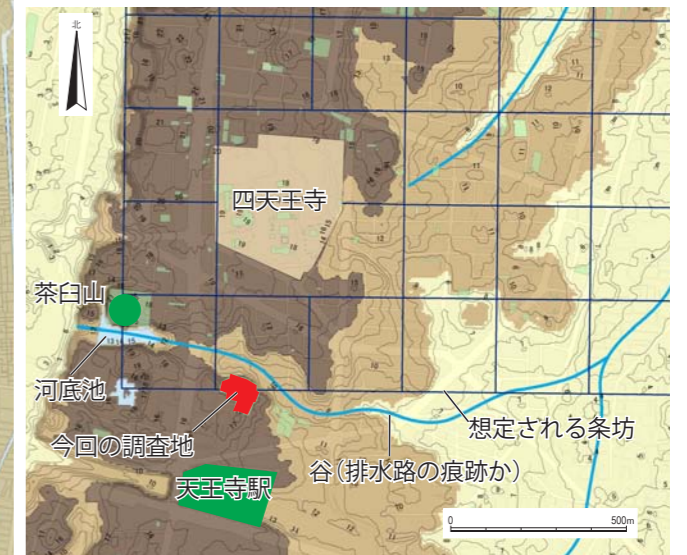


図2 調査地周辺の地形



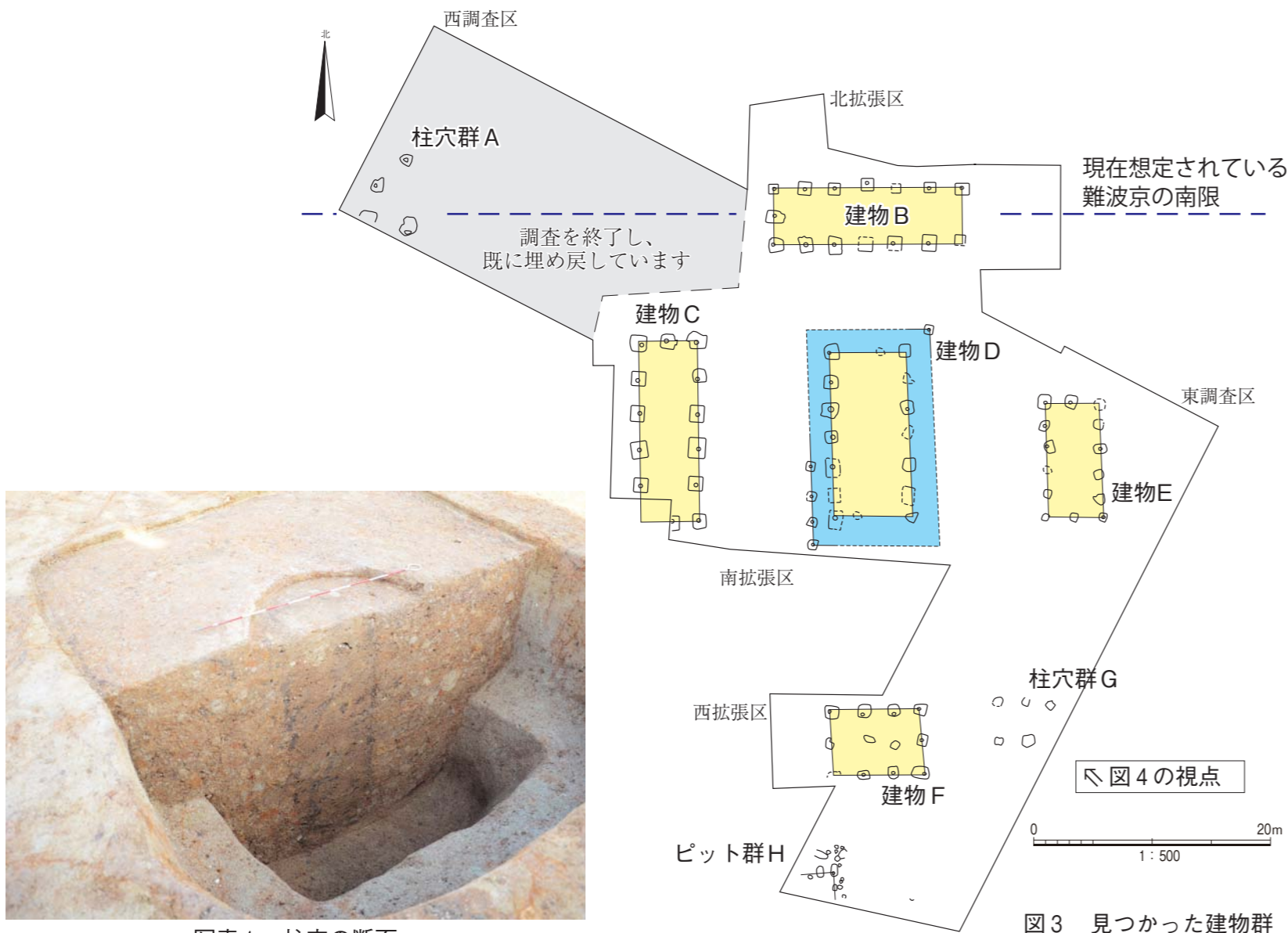


写真1 柱穴の断面

図3 見つかった建物群



図4 南東からみた建物群の復元イメージ(モデル作成：大阪歴史博物館 李陽浩)



写真2 調査地遠景(西から撮影)

難波宮・京関連略年表

和暦	西暦	できごと
推古元年	593	四天王寺を難波荒陵に造る
-	7世紀前半	四天王寺創建(考古学知見に基づく)
推古21年	613	難波より京に至る大道を置く
大化元年	645	乙巳の変(大化改新)、難波遷都
白雉元年	650	難波長柄豊碕宮(前期難波宮)造営開始
白雉3年	652	難波長柄豊碕宮完成
天武2年	672	飛鳥浄御原宮遷都
天武6年	677	内大錦下丹比公麻呂を撰津職大夫に任じる
天武8年	679	難波に羅城が築かれる
天武12年	683	複都造営の詔、難波を都とする
朱鳥元年	686	前期難波宮の大蔵(省)より出火、宮室全焼
持統6年	692	親王以下すべての有位官人に難波大蔵の鋤を賜う
持統8年	694	藤原京遷都
-	7世紀末	この頃、阿倍寺創建か
和銅3年	710	平城京遷都
神亀3年	726	藤原宇合を知造難波宮事とする(後期難波宮造営開始)
天平4年	732	宇合らに物を賜う(後期難波宮造営がひと段落か)
天平6年	734	難波京の宅地班給記事
天平16年	744	後期難波宮、一時的に首都となる
天平17年	745	平城京に都を復す
延暦3年	784	長岡京遷都
延暦4年	785	和氣清麻呂による三国川開削着手
延暦7年	788	和氣清麻呂、河内川排水路の開削に着手
延暦12年	793	難波宮を廃し、撰津職を撰津国とする
延暦13年	794	平安京遷都